ヤウィートックは、それをみがいて、その上に動物の絵を大胆に、そして深く彫ってあった。

私は半ば凍ったインクの入った缶をもってきて、指で黒いかすをすくって牙にまんべんなくぬった。その上に、注意深く一枚のトイレット・ペーパーをのせ、軽くなでつけたあと、その紙をはがした。紙には、オシャウィートックが彫ったデザインが、裏返しになってうまくうつっていた。

「それならわれわれにだってできる」彼は狩人らしくきっぱりと言った。

✣

こうして版画が取り入れられ、今ではケープ・ドーセットは版画村として知れわたるほどになった。「村の人は誰でも描けるけど、そのうち二〇人ぐらいがすごくうまい」と彼女。作品は村で厳選された上でトロントなどの市場に出されるが、評判がきわめて高く、いずれも高値でさばかれている。

ケノジュアクが一九六〇年に制作した「魅せられたフクロウ」は、羽根と尻尾を広げ、誇り高い表情をしたフクロウ(知恵の象徴とされる)を描いたもので、二十五枚が黒と赤、あとの二十五枚が黒と緑で刷られた。北西準州開基百周年の一九七〇年には、記念切手のデザインにも使われた。

その同じ年、彼女は夫のジョニーエボと一緒に、大阪万博のカナダ館にせっこうの大壁画を制作している。

今年六十三才のケノジュアクは、今も熱心に創作を続けている。これらの絵や版画は、彼女によると「鳥の羽ばたきのように私を襲ってくるアイデア」を図案化したものが多い。

ケノジュアク作「魅せられたフクロウ」

By permission of West Baffin Eskimo Cooperative ©1960

インシュリンを発見

フレデリック・バンティング チャールズ・ベスト

「肉が溶け去り、尿となって流出する」——と、二千年も前から恐れられていた糖尿病。糖尿病にかかると、糖分がエネルギーに転換せず、体は蓄積された脂肪や蛋白を消化するようになる。のどがひどく乾き、大量の水を飲んで、大量の甘い尿を排出する。食欲が異常にわく。唯一の治療法は、食事を厳しく制限して、体内の化学的バランスを正常に戻すしかなかった。腹一杯食べて死ぬか、カロリーを極端に減らしてふらふらと過ごすしか、道はなかったのである。

しかし一九二一年、カナダの若い二人の科学者がインシュリンを発見してから、これが糖尿病の特効薬となり、それまで不治の病として恐れられていたこの病は、それほど危険ではなくなった。

インシュリンを発見したのは、フレデリック・バンティング(写真)とチャールズ・ベスト。バンティングは第一次大戦に医師として従軍したあと、オンタリオ州ロンドンで整形外科医を開業していたが、一か月の収入がわずか四ドルしかなかったこともあるほど経済的に恵まれなかった。そのわずかの収入の道を捨て、器具や本を売り払って、新しい実験に乗り出したのだった。当時二十九才で、研究者としての経験はほとんどなかった。相棒のベストはまだ二十二才。生理学と生化学で修士号をとるため勉強中の大学院生であった。

National Film Board, Ottawa

二人は、トロント大学のジョン・マクロード生理学部長から、同部長がヨーロッパ旅行の間という条件で実験施設を借り受け、糖尿病をおさえる物質を探すことになった。

ほとんどの人たちが糖尿病にかからないのは、何らかの天然の物質のせいだ、と二人は確信していた。一八八九年に、フランスのオスカー・ミンコウスキーが、膵臓をとった犬は糖尿病で死ぬことを明らかにしていたため、二人はその物質Xは膵臓で分泌されているはずだと考え、犬の膵臓を使って実験をくり返した。そして、消化液を分泌する細胞から膵臓への導管をしばると膵臓がはやく変形することが分った。しぼんで変形した膵臓は消化液の製造をやめ、物質Xを破壊するものはなくなる。そのXを抽出して、糖尿病にかかった犬に与えれば、血液および尿の中の糖分をへらすはずだ……。

実験にとりかかってからおよそ二か月半後の七月二十七日、ついにきれいにしぼんだ膵臓が得られた。これを冷凍して粉にし、ろ化したのち、死にそうになっ